

ALEXANDRITE overdose



R18

BSD Unofficial Fannovel
Written by USHIROGAMI

！ご注意！

EPUB（電子書籍）ファイルを読めなかった方向けの単話 PDF 版です。

下記2つの既刊の後日談ですので、下記を未読でしたら先にお読みいただいた方がよろしいかと思えます。

全て太中の R18 小説作品ですので、閲覧の際はご注意ください。

・ [アレキサンドライト](#)

・ [とにかくいっぱい喘ぐ子って何だよ！？](#)

※『アレキサンドライト』の幕間

横浜の裏社会を牛耳る非合法組織ポートマフィア。その構成員は二種類に分けられる。

四年前に忽然と姿を消した歴代最年少幹部太宰治を知る者と、知らぬ者だ。

かの人物が敵対組織『武装探偵社』の一員となつて横浜に再び姿を現したとき、前者は動揺し、後者は関心を持たなかつた。

北米を拠点にする異能力者集団《組合》^{ギルド}によつて横浜の街全体が混乱に陥れられ、ポートマフィアも甚大な被害を被つていたとき、首領の森鷗外が武装探偵社との一時停戦を受け容れたことで、太宰治と現五大幹部の一角である中原中也——かつて黒社会最悪の二人組と謳われた二人が共闘する展開となつた。彼らが組合側の守りの要であつたラヴクラフトという男を撃退し、組合に利用されていたQを奪還したという知らせを受けたとき、前者の構成員は安堵し、後者はいささか面白くないという反応を見せた。

その数か月後、ポートマフィアの本拠地であるモリ・コーポレーションの本社ビル前に単身現れ、あろうことか中原の愛車のルーフに土足で立つた男がいた。太宰治である。彼は数十人の迎撃部隊から一斉にマシンガンの銃口を向けられていた状態で、拡声器を口元

に運び、このように叫んだ。

「あのさ中也ー！ 私たち、セフレはやめて正式にお付き合いしよう!!」

前者の構成員は「あー…ねー…」という反応を見せたが、ここにきて後者の構成員は激しく憤慨し、後日、中原幹部の執務室へ詰めかけ、「中也さん！ 俺達の中也さんを下衆な言葉で中傷しマフィアの面子を潰したあの薄汚い裏切り者を即刻誅殺させてください！」と訴えた。そのときの中原の表情はこけしのようで、何の感情も読み取れなかったという。ちなみに、一時停戦は首領の決定のため、当然誅殺云々は却下であった。

前者の構成員、中でも『今週の負け惜しみ中也』という小冊子を読んだことのある者にとっては、太宰治が中原中也をからかって遊ぶことは、空から雨が降るのと同じくらい見慣れた光景であった。組合戦での一件で再会したことで、またおもちゃにされているのだろうなあ、という程度の認識であった。

しかしそんな小冊子の存在も、マフィア時代の太宰治のあの独特な存在感も知らず、当時の彼の凄まじい功績も記録が消されているため眉唾な噂話でしか知らない、そんな「太宰治を知らない」構成員にとっては、武装探偵社などという生温い組織に寝返った奴が、

ポートマフィア最強の異能力者にして次期首領候補とされる中原を侮辱することは到底許容できなかつた。マフィアは面子と恩讐の組織なのである。

そんなわけで、「セフレはやめて正式に〜」発言以降、ポートマフィアの内部はなんとなくざわついていた。なまじ古株の構成員が新入りの中原シンパに「太宰さんは中也さんをからかって遊んでるだけなんだって。昔からあの人はそうなんだよ」などと余計なフォローを入れるものだからますます彼らの「組織の裏切り者・太宰治」への悪感情は燃え上がり、先走って暗殺を目論む者が現れては、某羅生門・彼岸桜で粛清されたりしていた。

からかっておもちゃにしたいだけなのか、侮辱して優越感に浸りたいだけなのか、本当のところは、昔も今も誰にも分からなかつた。

一体なぜ、彼は中原に拘るのか。

中原中也はその答えを、十五歳のときに一度貰っていたはずの答えを、きつとこれは自分に都合のいい解釈に違いないだろうからと決めつけて、胸の奥の一番深いところにしまひこんでいた。だから中原にも、太宰の真意は分からないままだった。



「……明日から、しばらく連絡してくんなよ」

私の身体の下で、ホテルの白い枕に押し付けていた顔を少しだけ動かし、中也は言った。
「……ああ。アレ？」

「どれだよ。何にも教えねえぞ」

「別に興味ありません、森さんが明日から国外の異能組織との交渉のために紅葉さんも連れて渡航するなんて話」

「おい、手前そこで聞いた。情報源を吐け——っ、ひゃっあっ！」

白い背中に浮き出た肩甲骨のカーブにべろりと舌を這わすと、中也はどすを効かせた低い声を素っ頓狂にひっくり返らせ、慌ててまた枕に顔を押し付けた。

まだ繋がったままの体内で陰茎をきゅうと絞められて、気持ちよさに思わず息が洩れる。そのまま背骨に歯を立てたら、濡れた粘膜がぶるぶると震えた。

「……っ、お、い！ もうやんねえぞ！」

「ええ？ もっとしようよ。というか、中也はここからが本番でしょ」

「さっきのが本番じゃないなら何がほん——っあ、あっう、……っごかすな、いや……ッ」

一度自分の精を受け止めたそこは、彼の乱れる吐息に合わせて収縮し、私の性器を押し戻そうとしたり、奥へ誘い込もうとしたりする。それはまるで中也の口から出る言葉と身

体が求めていることのギャップを表しているようで、ああもうどうしてやろうか、と攻撃的なまでの欲が腹からせり上がってくる。

「こっち向いて」

硬さを取り戻し始めた幹をその柔らかい場所で扱ってもらいながら、強引に彼の顎を取って唇を吸った。んんっ、と初め抵抗した声が、舌と男根で身体の内側をかき回されるうちに甘い音色に変わっていく。

耳をいじり、汗で貼り付いた横髪を掬って首筋を撫でると、くすぐったそうに身を振った。汗を吸った黒い革のチョーカーに人差し指がかかり、彼の肌との境目にできた隙間に入る。あれ、こんなに緩かったかなと思つた瞬間、ぱらりとそれは外れて、枕の上に落ちた。

あっ…、と中也が声をあげた。

家に帰ったら、大事に育てていた植物が枯れていた。そんな感じの声だった。

「……どけ。もうやらねえ」

さっきまでの可愛い抵抗は何だったのか、中也は片腕で私の身体を押し返し、ベッドから降りると全裸でシャワールームへと消えて行った。

「だから、購ってあげようかって言ったのに」

チヨーカーに小さな切り込みが入っていたのを見つけたとき、私への執着を捨てようとした中也に腹が立ったし、結局できなかつたという事実喜びを感じた。

新しい首輪をあげようか、と言ったが中也は頑なにそれを拒み、そのまま使い続けたのがとうとう裂け目が広がって切れてしまったというわけである。

「あのさ、私が切ったわけじゃないよ」

「分かってるよ、んなことは」

短いシャワーを終えて出て来た中也は、ときばきと身支度を整え、枕の上に落ちていたチヨーカーをそつと手に取ると、外套のポケットにそれを仕舞った。

「ねえ、やっぱりもう一回したい」

「駄目だ。今度は壁にめり込むまで殴り飛ばすぞ」

「こっわ……。だって、私のこれはもうその気になっちゃったし。中也の中に入れてよ……」
血が集まって太く脈打っているペニスを握って中也の視線をそこに誘導すると、彼はうつと一瞬目を泳がせたが、深く息を吐いて平静を装い、ベッド脇に備え付けられていた小さな自動販売機の前にしゃがみ込むと、ピッピッと指でボタンを押して何やら購入し、それを手に持って私の傍まで来た。

極厚の梱包材のような見た目の透明なオナホールだった。それに使い切りのローション

をぶち込み、ひっくり返して私のペニスにがぼつと被せる。「冷たっ！」と思わず悲鳴をあげると、中也はちよつと嬉しそうに笑った。

「俺のおごりだ。それで抜いて帰れよ」

「サイテー！　これが付き合っている恋人にする態度!?!」

「付き合つてねえし恋人になつた覚えもねえよ！」

「あ、今のつて私を振つたつていう」

「うるせえ馬鹿！　ばーか！　もうその茶番も終いだ。：ああ、そういえば手前、このチヨーカーは例の約束を俺が忘れないために用意したつつてたな。じゃあこれが駄目になつた今、俺はもういつ忘れてもいいつてわけだ。手前が振られる度に手前を慰めるつていうしようもねえ約束を」

「……今は私を振つてるのも毎回中也だけどね」

中也はそれには答えず、下半身に性玩具がくつついたままのかわいそうな私をフンと一瞥して部屋を出て行ってしまった。

ホテルに一人残された私は、まあせっかく買ってもらつたんだし捨てる前に一回使うか、とオナホを握つて数回抜き、やっぱりさつきまで得ていた刺激と比べると全然物足りなかつたので、携帯端末でこっそり録音しておいた中也とのセックスを再生し、目を閉じて彼

の艶めいた声に集中した。

「はあ……つ、中也……」

私のこういうところが、信用できないと思われているんだろうか。

信用してほしいのかと問われれば、別にそういうわけではない。あいつが私を信じていようと信じていまいと、私は会いたいときに会いに行くし、抱きたいときに抱く。昔から中也の都合を考慮するという習慣が自分の中に無いので何も問題はない。……などと言ったら、まだどやされそうだが。

セフレはやめて付き合おうと言った。れっきとした告白だった。あの後、昔一緒に泊まろうと約束していた温泉宿でも、自分が中也に執着しているということを白状したつもりだ。

そりゃあ、中也が私を「ただ、好き」なんて言ったことに比べたら、私の告白は、遠回しで、分かりづらくて、自分のプライドが傷つかないように予防線張ってて、あの純情男にはちっとも響かなかったかもしれないけれど。

でも、例えば私がさつき出て行った中也を息せき切って追いかけて、行かないでくれ、君のことが好きなんだと言ってみたところで、「今度はそういう作戦か」という目で冷やかに睨まれるだけに違いないのだ。私のこの手の予想はだいたい当たる。

『アッ…、あっ、ださい……っ、おく、だめ…!』

端末のスピーカーを通して聴こえる中也の声が切羽詰まって私の名を呼ぶ。出会ったときから何度も、ほとんど毎回キレ散らしながら呼ばれていた名前だ。それがこんなに弱弱しく、怯えながら期待して、あのすらりと伸びた両脚で私の腰を絡め取るように耳に纏わりつく。たまらなかった。

望み通りに奥を突いてやりたい、そう思って力任せにペニスを抜き差ししたが、人工の性器は奥まで突いてもただ行き止まりにぶつかるだけで、つまらなかった。

そう、性欲処理っていうのはこういう、つまらないもののことを言う。全然違うんだ、中也の中に出すときの感覚とは。

信用などしてくれなくていいが、あいつにはそれを、思い知ってほしい。

自身の吐き出したもので粘ついた玩具をゴミ袋に捨てて、私もシャワールームへと移動した。



首領と尾崎幹部が数名の部下を連れて南米へ発つてから、二十九日目だった。

予定ではあと半月滞在するはずだったが、思ったよりも順調に交渉が進んだため、明日には横浜に戻れそうだと首領から通信があった。空港で出迎えるつもりでいたのだが、南米の異能組織との交渉というのが麻薬の密売絡みで、どこからかその情報を得た民警が功を焦って空港に張り込んでいるらしいので、目立たないようタクシーで帰るよと言われてしまった。

二人の不在中、何かあったときのために首領の執務室のセキュリティキーを預かっていた。首領の部屋に入れるということは、この施設内の全ての部屋にも入れるということの意味していた。俺は一日に一度、首領と姐さんの執務室の扉を開け、前に入った時点から何か異変がないか、軽く室内を歩いて点検をした。こんな風に留守を任されたときは、いつもそうしてきた。

ポートマフィアの本部、表向きにはモリ・コーポレーションとそのグループ会社が入っていることになっているこの建物は、五つの棟がそれぞれ地下通路と渡り廊下で繋がっている。首領の執務室がある中央の棟を囲むようにして四方に幹部専用の執務室を持つ棟が立ち、元々は尾崎幹部の直揮部隊に用意されていた部屋で待機していることの多かった俺は、五大幹部に昇格したときに自分の執務室が作られた棟に移っていた。

昔は、首領の腹心として中央の棟に在ることの多かつた太宰とよく渡り廊下で出くわして、その度にくだらな言ひ合いをしたものだったが、あいつが俺よりも先に幹部に昇進して別の棟に移ってからは、会話どころか顔を見る機会すら減って、ひと月会わないということも珍しくなくなつた。思えば、そのあたりからどんどん太宰への感情をこじらせていったような気がする。

今日も首領の執務室から自分の棟へ戻る途中、しんと静まり返つた渡り廊下で、ふと足が止まつた。

今ならあの部屋に入れる。そう思つたのだ。

ずっと空席になつてゐる幹部の椅子。四年前までそこに座つていた男が使つていた執務室に。

太宰が組織を去つた後、何か消息を掴める手がかりを残してないか室内を探すよう首領から命じられ、数日間だけその部屋に入り浸つた。たぶん何も無いだろうけどね、と首領は言つていたし、俺も、あいつが去ると決めたなら、手がかりなんて残してはいないだろうと確信してゐた。

だから、太宰の執務室で一人過ごしてゐた時間、俺はただその場所で呼吸をしてゐた。むかつく消毒薬の匂いが消えるまで。

自分の棟から一番遠い棟の最上階にある、使用者のいない執務室の前に立った。認証端末に首領のセキュリティキーをかざすと、カチリと扉内部のシリンダーが回った音がして、ドアノブを掴んだら軽らかに開いた。

てつきり四年分の埃が積もっているだろうと思っただけで息を止めて入ったのだが、室内は清掃が行き届いており、換気設備も稼働していて、部屋の使用者がいない分、昔よりもむしろ整然とした部屋になっていた。

首領か姐さんがたまに清掃をさせていたのだろうか。確かに、考えてみれば、ポートマフィアの本拠地の一部屋が埃やカビまみれというのはいただけじゃない。首領の執務室の前を通り過ぎてここまで来ることがなかったから、清掃員が出入りしているのを見かけることがなかっただけか。

一歩、二歩、暗い色の絨毯を踏みしめて歩く。変な気分だった。

どこも汚れたり、壊れたりしていないのは、人の手が入っているということなのに、何も変わっていないからかえって、時が止まっているかのような錯覚を覚える。

太宰の匂いが完全に消えて、俺が入り浸るのをやめた日から、時が進んでいない。

まるで俺と同じだ。ずっと同じ男に執着して、それがいざ手に入りそうになったら、怖

くて前に踏み出せない。からっぽの部屋で太宰を想うことに慣れすぎて、同じ部屋で夜を明かすことに慣れない。朝になったら全部消えているのかもしれないと思うと、隣で眠ることが怖いのだ。

何も無い首筋に手を当てる。俺が太宰にとって『私の犬』であった証のチョーカーは、切れてしまった。そうなる前から、新しいものを買い直そうかと度々あいつは提案してきたが、断っていた。

『私の犬』とやらがあっさり置いて行かれるものだと分かった以上、もう一度それを欲しいとは思わない。セフレはやめて正式にお付き合い云々などと言っていたが、雑に扱われることが前提の関係の方がまだ何をされても想定の内だから気が楽だ。……正式にお付き合い？ 『私の犬』から『私の恋人』に昇格した後、また手放されたりしたら、俺はまでもでいられる気がしない。勢いあまって探偵社に乗り込み、あいつをぶっ殺してしまうのではないだろうか。痴情の纏れとかいう恥ずかしい動機で。

「……だったら、今殺しても同じか？」

部屋の奥まで歩いて、冷たいマホガニーの机に手を突き、扉がノックされるのを待った。コンコン、と背後で二度扉がノックされ、外から声をかけられる。

「中原幹部、少しよろしいでしょうか」

「ああ、入れ」

「失礼しま」

す、と最後の言葉は、そいつを床に引き倒してから聞いた。

「ごほっ……！ 何をするんです、私はただ——」

「黙れ。足音で分かるんだよ馬鹿野郎。変装するならせめてもうちよつと本気出せ」

床に打ち付けられた衝撃で咳き込んだ黒服の男に馬乗りになり、茶髪のウィッグとウェリントンタイプのサングラスを剥ぎ取った。癖のある黒髪を後頭部に纏めてピンで留めているその男の目がまっすぐに俺を見上げる。赤みを帯びたブラウンの瞳。

「……太宰。残念だ、超えちゃいけねえ一線も分からねえほど平和呆けたか」

「一線？ 中也と私の間のそれなら、とうに超えた認識だけど、っ、ぐ」

ゆっくりと身体を起こし、肋を踏みつける。革靴の踵越しに、みしみしと骨の軋む感触を感じた。は、はっ、と肺から押し出すように息を吐いて、太宰はそれでも笑っていた。

「……っ、か、わんないねえ……森さんがいなくなると、気が立って仕方ない……」

「そうだな。こういう馬鹿が現れるからだだよ。覚えてるか？ マフィアの掟を」

「何だっけ？ 忘れちゃった」

「一つ、首領の命令には絶対に従うこと。一つ、組織を裏切らないこと。一つ、受けた攻

撃は必ずそれ以上にして返すこと。よくのこのこと来れたもんだぜ、…裏切り者の太宰治」

「責めるなら二度も侵入を許したガバガバの警備体制じゃないの？」

白いワイシャツの襟を掴んで、にやついた顔を拳で殴りつけた。太宰は血の混じった唾を床に吐く。

部屋を汚すなよ、と俺が言うと、誰も使っていないでしょ、と軽く返された。

「やだやだ。…もし私がマフィアに残り、森さんの跡を継いでいたら、中也は毎日私の隣でそうやってピリピリしていたのだろうね」

「おめでたい妄想してんじゃねえよ。俺が今キレてんのは、手前の考えなしな行動に対してだ。首領の不在中に敵対組織の男、しかも組織の裏切り者の侵入を許して、無傷で帰せるわけがねえ。ただでさえ、こないだのクソ演説の一件で、俺の部下たちは手前を殺したがつてる」

「…：面子と恩讐、か」

「そういうことだ。今回は前みてえな小細工もなしか？ 今朝は郵便屋が来た記憶は無いぜ」

以前こいつは、探偵社の人虎に懸賞金をかけた人物の情報を入手する目的でわざとマフィアに自分を拘束させ、情報を得る前に俺に殺されてしまうことを防ぐため、——いや、

ただの嫌がらせで、五大幹部会を開催させる力を持つ脅迫状を予め送っていた。

今回もそういう仕込みがあるならば、これ以上痛めつける必要はなくなる。ないならば……。

「無いよ」

太宰は俺に胸倉を掴まれたまま、ゆっくりと上体を起こした。俺の足元で膝を折り、黒い背広の胸元に手を入れる。すぐさま俺は腰のベルトに隠していた短刀を引き抜いて、太宰の首筋に押し当てた。

「無いというか……もし、これを小細工と言われたら、少し……悲しい」

そう言っ、太宰は小さな青い箱を取り出し、俺の眼前に差し出した。

「それは何だ。爆弾か？」

「さあ、どうかな。うまく爆発してくれるといいのだけれど」

自分の携帯端末が震えた。短刀で狙いをつけたまま、太宰の胸倉から離れた手で画面を確認すると、首領が成田に到着したという連絡が入っていた。特に報告事項がなければ待機は不要だと書いてある。やはり首領のところにも、太宰が仕込んだ何かは届いていないらしい。

「ずっと考えていたんだ。中也是私のことが大好きなくせに、私が君を恋人にすると言っ

でも、全然応じてくれないなあって」

「……日頃の行いってやつだろ」

「そうは言うけどさ、中也だって気づいてるだろ。君に『慰めてもらった』あの夜から、私は他の誰も抱いていない。女性と会ったり、連絡を取ったのは、全て彼女たちに私を振ってもらって、君に私を慰めてもらう条件を満たすためだった。その在庫が尽きたから、君に直接告白をしたというのに、いっこうに信じてもらえない」

「付き合っていた女を在庫呼びわりするような男の言葉、信じられると思うか？」

「うん。だからね、君を私のものにしようと思っくのは、もうやめる」

太宰が指先で箱を開けた。

そこに収められていたのは、鈍色に光る指輪だった。内側に彩度の高い宝石が埋め込まれている。

「アレキサンドライト……」

「中也、私を『君の男』にしてくれ。これが、その約束の証だ」

俺の、男？

「て……め、なに、ふざけっ……」

太宰治が、俺の男。俺の。

「君は私を信用できないだろうけど、君自身のことなら違うだろう？」

俺のものにしていいのか。俺が、こいつのものになるのでなく。

「君なら、恋人を置いていなくなったり、手放したり、浮気したり、しないんだろう？」

「……………ッ」

当然だろう。俺を誰だと思っているんだ。女たらしで趣味が自殺の人間失格と一緒にするんじゃない。

舌打ちして短刀を腰に戻し、その指輪を台座から抜き取ると、俺は差し出されていた手を掴んで、その大きくて全然可愛げのない男の手を数秒見つめ、薬指に嵌めてやった。

「…………俺は、女の浮気は許すが、手前の浮気は許さねえ」

「ウケる」

「ウケんな。あと、俺は任務で急に連絡が取れなくなることもあるが、手前はしばらく連絡が取れなくなるときは事前にそれとなく教えろ」

「束縛強め自己中男ですわね」

「…………金ならありますよ」

「やったー♡ おさむお金大好き♡ 何買ってもらおうかな♡」

「あと…………の、…は？」

「ん？ あと何？」

「だから、……………ぶんは？」

「ええ？ 何？ もっと大きい声で言っつて」

「……………っ、俺の分の指輪は用意してねえのかよ！」

太宰は笑って、指輪が入っていた箱の台座を外し、その下に隠していた対の指輪を取り出すと、片膝を立ててうやうやしく俺の手を取り、視線だけで許可を取って手袋を外し、俺の指にも同じデザイン指輪を嵌めた。

「あの日私にくれた原石が、君の手にも戻ってきたね。……………中也？」

指先から、全身が発火したように熱かった。太宰は何も言えなくなつた俺を不思議そうに見上げて、そのときと真っ赤になつていた俺の顔を見て、「よかつた。ちゃんと爆発したみたい」と言つてまた笑つた。

「今度は本当に『五大幹部会』が開かれちゃうかな」
地下駐車場から車を出して、市役所通りを走らせていたとき、太宰はそんなことを言つた。

「お得意の予言か？」

「元幹部で裏切り者の私と二人でビルを出て行った。それもお揃いの指輪して。やばくない？」

「手前がすれ違ふ奴すれ違ふ奴に見せびらかして『五大幹部中原中也のオトコ、太宰治です☆』って自己紹介したんだろうが。明日からしばらく出社したくねえ……」

「まあまあ、要は君が主導権を握っている関係だと思わせておけばいいのだよ。あとは勝手に解釈してくれる。森さんや、他の幹部には説明をしないと済まないだろうけど。どうせ今までは付き合ってること否定してたんだろう？ ……まあ、適当に嘘ついて、うまくやりたまえ」

「別に。こうなったら事実をただ話すだけだ」

「不器用なやつ。処刑されることになったら観覧に行くね」

「いや扶けに来いよそこは」

助手席の窓から見える風景が、だんだん市街地から離れていくのに気づいた太宰が、「ねえ、今日はどこのホテルに行くの？」と情緒もへったくれもない質問を投げってきた。

「ホテルには行かねえ」

「えー!? 嘘でしょ？ この流れで？ 行こうよ！ 先月行ったあのポロいところでいいか

らさあ」

「あー、うるせえうるせえ。今日は、俺の部屋に行くんだよ」

えっ、と虚を突かれた顔で太宰は騒ぐのをやめた。

「いいの？ 今まで一度も入れてくれたことなかったのに。場所は知ってるけど」

「なんで知ってんだよ。……手前は俺の男なんだろ。だから、俺の部屋に連れて帰る」

「……………」

「……………なんか言えよ」

「とりはだがすごい」

「可愛くねえな!!」

「可愛くなくても捨てないでね♡」

ぎゃあぎゃあ言い合いをしながら、山手方面へ続く狭い坂道を登って行く。

その間も、ハンドルを握る俺の左手の指に注がれる視線がずっと、火傷しそうに熱かった。



中也がたまにしか帰らない部屋が山手にあることは知っていた。

セーフハウスとして契約している他の部屋は、どれもポートマフィアの活動拠点に近い場所にある、いかにもな感じのタワーマンションなのに、一つだけ、二階建てのメゾネットが三軒並んでいるうちの一番奥の物件を買っていた。山手のワシン坂の途中にある、どこへ行くにもだいぶ歩かされる不便な立地だ。

どういうつもりで買ったのだろうと思っただけ、どうせ自分が招かれることはないだろうしな、と気にしないことにした。その場所だった。

「着いたぞ。……どうした？」

ガレージに車を停めて、そこから白い正方形の石畳の上を歩いて玄関の灯りを目指す。隣と、その隣にも似たような建物があって、二階の窓から温かい光が洩れていた。立ち止まってそれを見上げていた私に中也が声をかけた。

一般のご家庭じゃないか、こんなに近くで、居心地悪くない？

声を出して尋ねたつもりはなかった。けれど、中也は私の視線の先を辿り、ごく自然に答える。

「たまに、ああいうのが、分からせてくれる」

何を、とは聞かずに顔を近づけて、触れて離れるだけのキスをした。中也は慌てて玄関

のドアを開け、私の腕を引いて中へ招き入れる。家の中は、空気がひんやりと冷えていた。「んっ、く、つを、ふっ…、ぬげ、って、待つ、…おい！」

車と家の鍵を持っていて彼の右手の指と指の間を縫うように繋いで、仰せのままに廊下の途中で靴を片方ずつ脱ぎ散らかし、細い腰に手を添え、抵抗する唇を塞ぎながらダンスのように纏れ合つて私たちはフロリングの廊下を進んだ。

ふっ、とか、みつ、とか言ったのが聴こえたから、今途中にあつた部屋がバスルームとキッチンかな。いや、キッチンはたぶん二階だろう…そちには用は無い。

廊下の突き当たりの扉を開いたら、予想通りそこがベッドルームだった。昔、『汚濁』を使った後に中也を彼のセーフハウスまで運んでやると、何度目かのときから、玄関から最も近い部屋にベッドが移動されていた。なんだかムカついて、玄関に寝かせたり、その場に放置して帰ったりするようにしたら、翌日すごく機嫌の悪い中也を見れた。

今もこの癖を続けてくれていたのなら、次からはちゃんと運んでやってもいいかもしれない。

ベッドカバーが掛けられた大きなベッドの前まで追いつめて、そこで唇を離してじっと見つめてやると、このまま押し倒されると思っていたのだろう、中也は「ほんつとに意地の悪い奴だな」と言つて私を睨みつけ、ベッドカバーごと布団を捲り、自ら真っ白なシー

ツの上に倒れ込んだ。

「そういうところも好きなんでしょ？」

「そういうところが好きなわけじゃねえ」

「じゃあ、どういうところ……？」

中也の上に覆い被さって、着ていたジャケットを床に落とし、掌を重ねる。先月まではなかった指輪の感触を確かめるように指と指を絡める。中也も、右手で私の左手を確かめていた。

理由のない『好き』も嬉しいけれど、理由のある『好き』も欲しくなっちゃうよね、と私が言うと、それは欲張りすぎだろ、と、シャツの小さな釦を外される感触だけです。声を上擦らせながら、中也が言った。

「俺なんて、どっちも貰ってねーんだぞ」

「そうだった……？」

「そういえば、中也が起きてるときに言ったことはなかったかもしれない。」

「そうだよ……つ、うあつ、ちゃんと言うこと言わねえで、こんなことばつ、か」

「中也、乳首すっごく感じるようになっちゃったねえ」

こんなことばつかしてたからかな。そう揶揄って、ぴんと立ち上がった乳首を爪で

はじくと、中也は身を振って悶えた。乳輪を舌と歯で刺激しながら、もう片方の乳首を親指で捏ね回すと、思わず高い声が洩れて、恥ずかしそうに顔を羽根枕に押し付ける。

「ここ自分のおうちなんですよ？ 声……我慢しないでよ」

「手前に聞かれたくねえんだよ！」

「えー……」

私は中也の声聞きたい。シャツを脱がせながら耳に舌を突っ込み、声を注ぐ。露わになった白い肩がびくんびくんと震えた。

「ね、おねがい」

まるで耳殻に歯をてて甘噛みすると、中也は膝をもぞもぞと動かして、両脚で私の下枝を挟み込んだ。腰が疼いてきたのだろう。

シートと背中の中に手を差し込んで、背骨を優しく撫でながら、少しずつ体勢をずり下げる。脇腹に舌を這わせて腰骨を噛むと、私をつかまえていた両脚はしなだれ、ゆっくりと開いた。

彼の細身のスーツのズボンを押し上げて主張している欲望に布越しで触れる。下を脱がせるときはいつも死にたいくらいに恥ずかしいって顔をする彼の腰のベルトのバックルを外し、物騒なナイフごと引き抜いて床へ捨てた。ジッパーを歯で挟んで開けたら、興奮し

きった雄の匂いが鼻をつく。

勃ち上がった肉芯を口に含むと、「まつ」とか「なん」とか制止の意味らしい音を吐いて、私の髪をくしゃりと掴んだ。その拍子に、頭の後ろで留めていたヘアピンが外れて、耳に掛けていた髪がほつれる。

「うわ…一か月、ちゃんと抜いてた？ すっごい匂い……」

「うるせ、…ッ、やめろ、いい、いいから……！」

口でしてやるのは初めてだったが、あんまり慌てるので存外興が乗ってきた。初めて中也にフェラしてもらったときのことを思い出す。深紅のチャイナドレスを着て、私の足元に跪き、一心不乱に私のペニスをしゃぶっていた。きもちいいかよ、なんて自信なさげに聞いてきて。

あれは可愛かった。思い出すだけで抜ける。私のために用意された、私の中也。

自分の唾液と中也の先走り指に絡め、ちよつと会わない間にまた硬くなってしまった後孔に指を入れる。内壁を広げながら擦ると、入口に私の指が当たってぴちゃぴちゃと水音を立てた。

「あ、ダメ、どっちかにし、は、ひっ、ひ……ッ」

唇を窄めてちゆうと亀頭の先端を吸い上げ、二本に増やした指で前立腺を押し上げる。

魚のようにビクビク跳ねて、中也が私の口の中で射精した。どろっとした液体が喉に貼り付く。

「おえっ……中也、よくいつもこんなことできるね。マゾ？」

「やらせてる奴が何言ってるんだ！　　たく……だからやめろって言ったろうが」

手の平に吐き出した精液を彼がベッドサイドから取り出したティッシュでごしごし拭う。中也はよくこんなもの飲めたなあ、と思いつながらそれを見ていたら、またいやらしい中也の表情がいくつも頭に浮かんできて、私の下半身もずんと重くなる。

中也がそれに気づいて、お返しという風に私のズボンを脱がせにかかった。

「中也……啞えてくれるなら、こっちがいいな」

「あっ、んんっ……！」

指を三本に増やして、中也のなかを掻き回す。指じゃ届かない場所があるのだと分かるようにトントンと壁を刺激した。中也の腰が、無意識にイイ場所を探りながら切なげに揺れるのを、こちらが焦らされている気分で見下ろす。

「足りない？　さっき射精したばかりなのに」

「は、あ……ッ！　あ、……もう……！」

「私は君の男だからね、君のしてほしいコトをしてあげよう。ねえ……どうする？　この

まま、指でイかせてあげようか……?」

指を動かしながら優しく言うのと、中也は唇を噛んで、ふるふると首を振った。目尻に溜まった涙が、私を睨んだ拍子に一筋流れる。

「……いれろよ、指じゃなくて、はやく…手前ので」

奥まで突いてくれ、とたどたどしく懇願した中也の声と表情で、頭の中がへんな化学物質で満たされていく。ペニスがずきんずきんと痛いくらいに張りつめている。これを身体の中の柔らかい場所に入れて、めちゃくちゃに動かしていいと言われているのだ。もし私が狼なら、涎が止まらなくなっているだろうな、と、不意に彼の肉を食いちぎる自分を想像した。

私は中也を押さえつけ、射精したばかりで小刻みに痙攣している腹の中に剛直を押し込んだ。

「ヒッ、アー、あ、い、アアアッ!」

待ち望んでいたとばかりに、中也の肉は入ってきた私を包み込み、ひだを擦り付けながら吸い付いて来た。私の方が食われているみたいだと、その途方もない快感にうち震えながら、パンッパンッと衝動のままに腰をぶつける。

彼にはあんな風に言っておいて、私自身も、この一か月、自分に禁欲を強いていた。マ

フィアの、つまり中也の都合で我慢させられた性欲は、責任をもって全部中也のなかで飲み干してもらおうと思っていたのだ。だから、彼のなかを出たり入ったりしている今もうすでに、鈴口から我慢汁が出て止まらない。肌がぶつかる音と一緒に、蜜壺から愛液がかき混ぜられて溢れ出る音が混ざる。

「すごい締め付け……あんまりもたなそう」

そんなことを呟くと、彼のナカはますますきゆうと収縮して、私をねだった。

ナカに出してほしいんだね、と耳元で囁くと、想像したのかそれだけで泣き声に近い声を上げて達した。凶悪に締め上げてくる内壁をずっずっぶと突いて、彼の腰を持ち上げて、零れないようにどくどくと注ぎ込んだ。

「あ、あ、あっ……ふあああ……」

ナカで出てる……と快感でうつろになった目で呟いて、唇を所在なげに動かした。それを塞いで、唾内を舌でじっくり愛撫する。中也も自ら舌を絡め、絶頂の余韻に浸っている。

「ふふ……きもちいい、中也のからだ。溶けそう」

「あ……ださい……」

「今日は晴れて恋人同士になれたことだし、久しぶりにアレ見せてほしいなあ」

「あえ……？」

ぼーっとしていた中也の身体を引き寄せて膝の上に乗せ、彼の弱い箇所を下からズンツと突き上げた。

「~~~~ツツ！」

中也は脳天を貫かれたみたいに仰け反って両目をぱちぱちと見開き、私の頬に涙の粒を降らせた。

まだ硬度を取り戻している最中の熱の塊をめちゃめちゃに抜き差しし、さつき自分が吐き出した精液を擦り付ける。

「やあっ……！ それっ、やめてッ、んアアッ！」

「どうして？ 中出しされた後ぐちゅぐちゅされるの、大好きでしょ？」

「きもちいから、きもち……っ、ちよっ、と、まっ……！ っ、っ……♡」

「そうそう、きもちいーね……どこ擦って欲しい？ 入り口？ おく？」

「は、あ、ン……♡ や、め」

「ねえ、どこ？ 答えて……ちゅうや」

「あ、お、おく……♡」

「うんうん。いいよ」

グリユグリユと奥の壁を円を描くように擦る。ペニスに再び血が集まって、中也の腹を

膨らませる。はあはあ、と呼吸の整わない彼の唇をべろりと舐めて、ふっと力が抜けたところを一気に深く突き上げた。声にならない声をあげて中也が髪を振り乱す。

「あっ、あっ♡ おぐっ…! はいる♡ はいっちゃう…♡」

「そうだねえ。ちよっと力んでみて? そしたら、はいっちゃうから」

「ふ、え…? あ、うあっ、くる♡ だめっ、はいっちゃうだめ♡」

中也の身体の奥に、ピツタリと鈴口を押し当てて、彼が私に言われるまま力んだ拍子にわずかに口を開けたそこに肉棒を押し込む。一度先端を入れてしまえば、あとは貪欲な中也の身体が奥へ奥へと吸い込んでいくのに任せればよかった。

「はーっ…:…これきもちいい…:…ふふ…:…中也ア、ぼーっとしちゃうとエロ漫画になっちゃう癖、まだなおんないね」

「んっ♡ ん♡ それはあ♡ てめえのせい、アッ♡ で…:…っ」

「うん、私のせい。そんな風になっちゃうのも、こんなに気持ちいいのも、泣いちゃうのも全部…:…私のせいだよ中也。分かってる?」

中也を激しく穿ち、腰を突き上げる。何回でもできそうだと思えてしまう。実際は無理なのだろうけど、繋がった部分が二人分の体液で泡立ちぐちゅぐちゅと音を立てているのを見る度に、煽られ、官能を揺さぶられる。ばかになってるのは、実際私の方なのだろう。

「……っ、あ、あっ！ わか…んねえよ！ あ…♡ もお…！ ちゃんと、言えよ！」
「……………好きだよ」

どうせ信じないだろうと思った。けれどその言葉は中也の青い瞳の中へ吸い込まれ、彼の中でぶわりと赤い花に変化して咲いた。裸で男の膝に乗りながら、表情だけ初心な少年のように赤く染まっている。…その顔に、見覚えがあった。雨上がりの海辺の町で、いつか見せてくれた顔だ。

ああ、私。思い出した。

なんだ。自分ばかり長年片想いしてたみたいなことを中也は言ってくるけれど、伝えたのは私の方が先だったんじゃないか。

まだうろたえている彼の身体を揺すり、律動を再開すると、ふあっ、あっ、と思考を快楽に溶かしながら喘ぎ、両手を私の肩に添える。私はその左手の薬指にキスをして、彼の胸にとんとと右手の人差し指を突き付けると、その手を銃の形にして言った。

「私は中也が欲しいだけ」

いじめたつもりはないのに、中也はぼろぼろ泣きながらイッて、頭がおかしくなりそうだと行って、私に強くしがみ付いた。

明日はお互い使い物にならないだろうな、と思いながら、離してやる気はなかった。

出会ったころから長い間秘めた思いが、今は二人の指に輝いている。彼が私にもたらし
た色鮮やかなアレキサンドライト。

終わった恋の続編ではなくて、ずっと綺麗だと焦がれ続けていた宝石。

アレキサンドライト・オーバードーズ

(単話PDF版)

2022/6/19発行 データ無料ダウンロード作品

繪子 (うしろがみ)

Pixiv ID : 2660047

※この本は個人的に作られた非公式ファンノベルです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載を禁じます。このPDFファイルを意図せず入手された方はデータ削除をお願いします。